

令和7年度

北秋田市読書感想文・読書感想画

コンクール作品集

読書のめで



読書の如き

「表紙」題字 滑川道夫先生

昭和初期の教育家。一九〇六年生れ。秋田師範学校卒。

児童文学と学校図書館の普及に尽くした。

絵

綴子小学校 一年 成田陽斗

令和7年度北秋田市読書感想画コンクール

特選 「ライオンのカラフルなせかい」

書名 空とぶライオン

著者名 佐野洋子

もくじ

発刊によせて

北秋田市教育長

佐藤昭洋

4

読書感想画

☆幼稚園・保育園の部

〈特選〉わたしのおしろであそびましょう！

前田保育園

佐藤彩

5

☆小学校の部

〈特選〉ライオンのカラフルなせかい

綴子小学校 一年

成田陽斗

7

講評

読書感想文

☆小学3年生の部

〈特選〉しつぱいにかんぱい！

綴子小学校 三年

佐藤昭洋

4

〈入選〉ぼくがまもる……

米内沢小学校 三年

佐藤彩

5

おばっちが教えてくれたこと……

鷹巣小学校 三年

成田陽斗

11

☆小学4年生の部

〈特選〉ぼくが知らなかつたゴミの話……

鷹巣小学校 四年

佐藤昭洋

13

〈入選〉水族館の飼育員さんはすごい！

阿仁学園 四年

成田陽斗

14

佐藤昭洋

乙葉也

15

成田陽斗

佐藤昭洋

16

成田陽斗

佐藤昭洋

17

みんななかよく
勇気とやさしさのビザ

米内沢小学校 四年 紹子小学校 四年 近藤彩蓮

☆小学5年生の部

〈入選〉「クジラと海とぼく」を読んで

米内沢小学校 五年 羽場大耀

☆小学6年生の部

〈入選〉少數派になる勇気

清鷹小学校 六年 中嶋真悠

☆中学校の部

〈特選〉人を見つめたい

鷹巣中学校 一年 鷹巣中学校 一年 堀内希咲

〈入選〉「違い」が希望になる

鷹巣中学校 三年 佐藤あおい

よりよい人生を送ること

鷹巣中学校 一年 庄司心優

優しさの形

鷹巣中学校 一年 鈴木萌生

☆高校・一般の部

〈特選〉「神さまを待つている」を読んで

成田洋子

〈入選〉君に伝えたいことがある

成田八千代

講評	令和7年度 北秋田市読書感想文コンクール入賞者一覧	令和7年度 北秋田市読書感想画コンクール入賞者一覧	応募された方々
	北秋田市・鷹巣	北秋田市・鷹巣	北秋田市・鷹巣
	成田洋子	成田八千代	成田洋子
	佐藤あおい	佐藤心優	佐藤心優
	庄司希咲	鈴木萌生	庄司希咲
	堀内大耀	堀内大耀	堀内大耀
	近藤彩蓮	近藤彩蓮	近藤彩蓮
	羽場大耀	羽場大耀	羽場大耀
	中嶋真悠	中嶋真悠	中嶋真悠
	21	20	21
	19	18	19

審査の先生	庄司美穂子	(米内沢小学校・審査委員長)	工藤美香	(鷹巣小学校)	36	35	34	31
大渕倫子	(鷹巣東小学校)	田芳明	(綴子小学校)	29	27			
木村裕文	(清鷹小学校)	田陽子	(米内沢小学校)	25	24	23	22	
津谷美穂子	(合川小学校)	田雅子	(義務教育学校阿仁学園)	21				
佐藤貴子	(鷹巣中学校)	田竜也	(秋田北鷹高等学校)	20				
嘉藤		田森	(北教育事務所)	19	18			

〈読書感想画〉
嘉藤貴子(北秋田市教育委員会事務局学校教育課・審査委員長)

…… 発刊によせて ……

「燈火（灯火）親しむべし」

北秋田市教育長 佐藤昭洋

「読書の秋」といわれるこの時季は、全国の「読書週間」が開催され、第79回目となる今年度は、「ここにとあたまの、深呼吸。」という標語のもと、「文化の日」を中心とした10月27日から11月9日の期間に、全国で様々な取組が行われました。本県では、11月1日を「県民読書の日」として、10月11日から11月9日の期間で「秋田県読書フェスタ」を開催し、本市の8イベントを含む、県内各市町村で総計257のイベントが実施されました。

本市でもこの時季に、読書感想文・読書感想画コンクールを含めた「読書まつり」として実施してから4年目となり、今年も図書館内に隠れたぶつくりまくんを探す「ぶつくりまくんをさせ！」など7イベントを開催しました。以前とは違った時季での開催となつたにもかかわらず、昨年度までの4年間でたくさんの市民の皆様に参加いただき、すっかりこの時季の実施が定着してきたものと感じています。

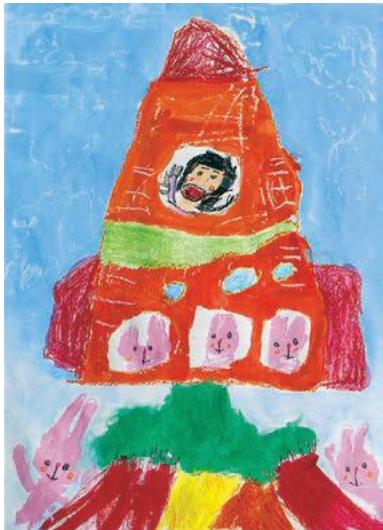
さて令和7年度の北秋田市読書感想文・読書感想画コンクールには、小学校3年生以上対象の読書感想文に45点（小

学校36、中学校6、高校・一般3）、小学校2年生以下対象の読書感想画に314点（幼・保93、小221）の応募がありました。たくさんの児童生徒が読書に親しんでくれたことを思うと、とてもうれしくなりました。本の世界に飛び込んだ自分を、画用紙いっぱいに描いた作品は、見ていて楽しくなりました。特選となつた読書感想文は、失敗体験やゴミ問題などの自分たちの生活に直接関わる問題や、友達との関係を通して自分自身の生き方を考えるなど、正面から向き合い深く考えている本市の子供たちの感性に驚きました。作品を応募してくれた市民の皆様、家庭で支えてくれたご家族の皆様、応募に当たり指導してくれた先生方、更には、審査していただきました審査委員の皆様、本当にありがとうございました。

ところで、なぜ「読書の秋」と言われるのでしょうか。調べてみたら、「燈火（灯火）親しむべし」という漢詩の一節から、「秋になると、涼しくなり、夜も長くなつて、燈火、つまり明かりの下で読書するのに適している」ということだと書かれた記事があり、その理由が分かりました。本冊子に掲載されている読書感想画や読書感想文は、北秋田市で生活している皆さんの中のドラマが、澄み渡る秋の夜空に輝く星のようになたくさん散りばめられている宝物です。この作品集を紐解き、皆さんの感じた世界を、皆さんと共に感じてみたいと思います。

保育園・認定こども園の部

《入選》



「おおきなおおきなにんじん」刀根里衣／小学館
阿仁合保育園 上杉茉白

《特選》



わたしのおしろであそびましょう！
前田保育園 佐藤彩

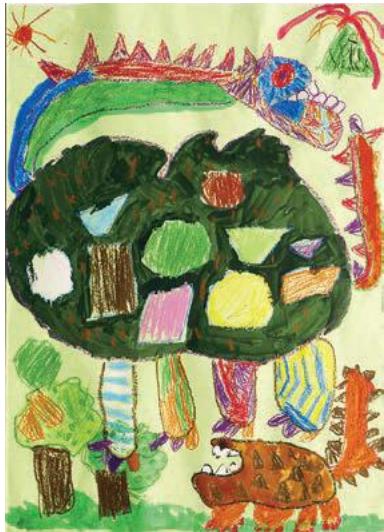
『ぐるんぱのようちえん』
西内みなみ／福音館書店

《入選》



うみのなかにいってみたいな
米内沢保育園 齊藤悠真
『にじいろのさかな』
マーカス・フィスター／講談社

《入選》



うわあ～！あつきいなあ～
前田保育園 柳谷奏汰
『おまえうまそうだな』宮西達也／ポプラ社

《佳作》



えきにとうちゃんく
鷹巣中央保育園 佐藤蒼虎
『むしむしでんしゃ』内田麟太郎／童心社

《入選》



パパのうんてんみんなであうえんしているよ
米内沢保育園 北林佑翔
『おたすけこびと』なかがわちひろ／徳間書店

《佳作》



はなびたのしそう

南鷹巣保育園

兎澤 薫

『よつかいえんのなつまつり』
田中あつこ／ひさかたチャイルド

《佳作》



そらをとびたいな！
綴子保育園 畠山茉優
『めっきらもっきらどおんどん』
長谷川摶子／福音館書店

《佳作》



ぱくのくえは、うちゅうの110かいだて！！

阿仁合保育園

鈴木 格也

『100からだのくえ』
いわいとしお／偕成社

《佳作》



こんちゅうだいすき
鷹巣東保育園 松尾奏壱
『とべバッタ』田島征三／偕成社

《佳作》



おうちからはたらくくるまがたくさんみえたよ
米内沢保育園 安藤一真
『おやすみはたらくくるまたち』
シェリー・ダスキー・リンカー／ひさかたチャイルド

小学校1年生の部

《入選》



クッキークッタははこつたしのくまん
阿仁学園 1年 細貝 在
『あま~いじわく』柴田ケイコ／PHP研究所

《特選》



ライオンのカラフルなせかい
綴子小学校 1年 成田陽斗
『空とふライオン』佐野洋子／講談社

《入選》



チリンのあたんじょうびかい
清鷹小学校 1年 藤嶋桃々
『チリンのすず』やなせたかし／フレーベル館

《入選》



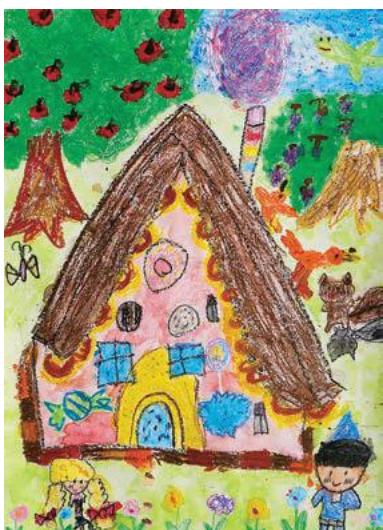
あさがあとあそぼう
米内沢小学校 1年 吉田琥翔
『あさがお』荒井真紀／金の星社

《佳作》



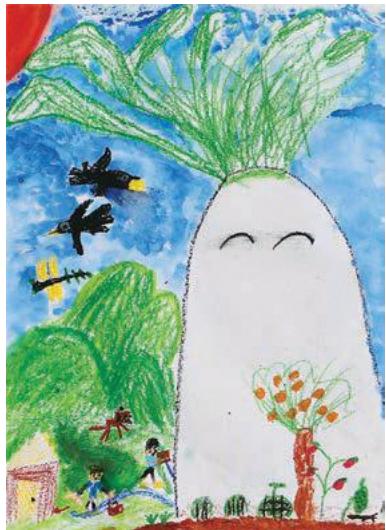
あさがあとわたし
米内沢小学校 1年 庄司悠
『あさがお』荒井真紀／金の星社

《入選》



ふしきなもじこあるおかしのいえ
鷹巣小学校 1年 松橋 雪
『ヘンゼルとグレーテル』
グリム・作 中脇初枝・文／ボブル社

《佳作》



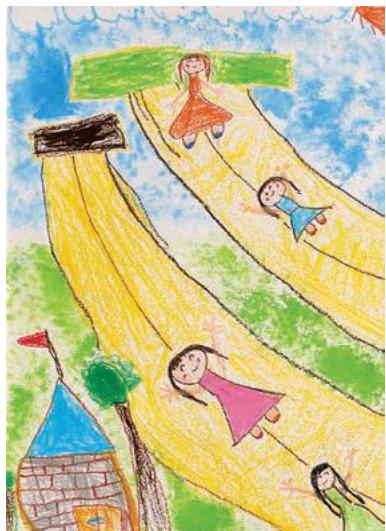
きよだい だいこんの
みら
鷹巣小学校 1年 小塚 韶斗
『だいこんのかじ』渡辺節子／ほるび出版

《佳作》



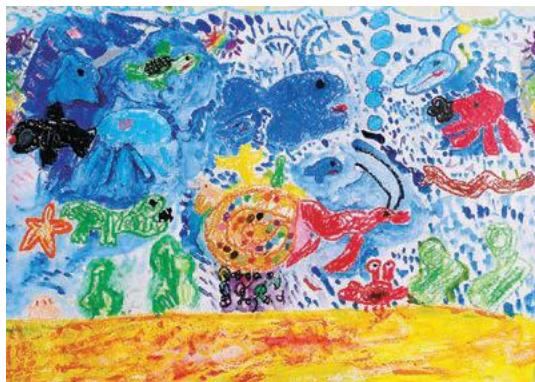
あたんじょうびパーティー
清鷹小学校 1年 福原朱織
『さよならジャンボ』
やなせたかし／フレーベル館

《佳作》



ながいバナナのすべりだいあそぼう
合川小学校 1年 吉田唯亜
『なんばえはなしつ』しかへがな／北彰介／銀河社

《佳作》



やどかりのパーティー
鷹巣小学校 1年 工藤優月
『やどかりの おひっこし』
エリック=カール／偕成社

小学校2年生の部

《入選》



魚たちとあそんだよ

鷹巣小学校 2年 近藤心來

『ほしめぐらやのワジラ』
レイチャエル・グライトン／トマーウィングズ

《入選》



ぼうしゃさんから
かえってきたよ
清鷹小学校 2年 石川心絆
『ミリィのすてきなぼうし』
きたむらさとし／BUSHI出版

《佳作》



やさいがいっぱい おいしいごはん

鷹巣東小学校 2年 赤石湊真

『よるのやおやさん』穂高順也／文溪堂

《佳作》



にぎやかな海の中

米内沢小学校 2年 若松詠樹

『みんないきてる みんなでいきてる！』
エリック・カール 絵 くどうなおこ 詩／偕成社

《佳作》



3人で楽しもう

鷹巣小学校 2年 コリガン 琉生

『ともだち』リンダ・サラ／ひさかたチャイルド

《佳作》



ぼうしゃさんから
かえってきた わくわくのみんな
清鷹小学校 2年 西村藍心
『ミリィのすてきなぼうし』
きたむらさとし／BUSHI出版

《佳作》



みんなの大きな木

鷹巣小学校 2年 水戸帆華
『おおきなきがほしい』佐藤さとる／偕成社

《佳作》



みんなであそぼう

鷹巣小学校 2年 佐藤心陽

『ほしがりやのクジラ』
レイチェル・ブライト／トゥーヴァージンズ

《佳作》



新しい家ができたよ

合川小学校 2年 石田惺羅

『やどかりのおひっこし』
エリック＝カール／偕成社

読書感想画講評

今年は、保育園・認定こども園から93点、小学校1年生が113点、2年生が108点、あわせて314点の作品が寄せられました。たくさんのご応募、ありがとうございました。

絵本の中の熊さんは、のんびり、おっとりとかわいらしいですが、現実の熊さんはそうはいかず、食べ物を求めて暴れ回っています。

実りの秋、熊さんは冬に備えておなかいっぱいに、人間の子どもたちは心も体も豊かに健やかに、生き物みんながともに仲良く幸せに暮らせるといいのですけどね。

審査は例年通り、二人の審査員が相談しながら、それぞれの年齢に応じた表現が、子どもの感動とうまく調和している作品を中心に選んでいます。

多くの応募作品の中から受賞された皆さん、本当におめでとうございます。

選んだのは、次のような作品です。

○描きたいことが伝わってくる。

いろいろな小さな虫がたくさん描いてあれば、虫が大好きなんだなあとわかります。紙いっぱいに大きなくじらが描いてあれば、くじらの大きさにびっくりしたんだなあとわかります。描きたいものやことを思いっきり描きましょう。

○お話の中に入り込んだ自分の気持ちをよく表している。

楽しい、うれしい、わくわくしている、はりきっている、そんな気持ちが顔の表情や体の動きに表されると絵が生き生きとして見えます。

○きれいでここちよい色で描いている。

絵の具を使うときは、いきなりたくさんの色を混ぜてしまうとごってします。色を重ねすぎたときもにごってします。近くの色同士を混ぜる、濃い強い色は少しづつ混ぜるなどの工夫をしてみましょう。渋い色や深みのある色とにごった色は違うのです。

○表し方に自分なりの工夫がある。

色選び、指や筆の使い方、技法を使ってみるなど表し方にはいろいろな方法があります。

自分の描きたいものやことをすてきに表すためにいろいろなことをためしてみましょう。

○年齢にあった表す力がついている。

年長さん、一年生、二年生では表現力が違うのがあたりまえです。それぞれの年齢にあった描材や技法を使えるようにしたいものです。大人のような表現をする必要はありません。

何よりも大切なのは、描きたい気持ちがうまれること、もっと描きたいという楽しさがあることです。子どもたちが、本を読むこと、絵を描くことをずっと好きでありますように。

北秋田市教育委員会学校教育課 嘉藤貴子
秋田県教育庁北教育事務所指導主事 田森舞

小学3年生の部

〈特選〉

しつぱいにかんぱい！

綴子小学校 三年 佐 藤 カンナ

「かんぱい」は、おいわいですること。でも、この本のタイトルは「しつぱいにかんぱい」。しつぱいしたときにかんぱいをしてもいいのかな？と思いました。

わたしは、時々しつぱいをしてしまうことがあります。そんな時、しつぱいをなかなかとめられなくて、下を向いていました。学校の図書室でこの本のタイトルを見て、読んでみたくなりました。

主人公の加奈は、一年生から、ずっとリレーのせんしゅにえらばれていました。でも、運動会のリレーで、しつぱいしてしまい、おちこんでしまいます。そんな時、おじいちゃんから電話がかかってきて、いとこたちとお昼ごはんを食べることになります。

そこで、みんなが自分のしつぱいしたことを話し始めたのです。だれでもしつぱいすることがあって、みんなしつぱいをしたら気持ちを切りかえて、「かんぱい」と言つていました。でも、心の中では、「次はしつぱいしないようにがんばろう。もう一どチャレンジしよう」と心に言い聞かせていました。

おじさんやおばさんが、しつぱいのお話がおわった後、だれの時も「かんぱーい」と言つていたところがいいなと思いました。この本を読んで、この世の中は、かんべきな人はいないから、

しつぱいしてもすぐにあきらめるのではなく、しつぱいしても、もう一どチャレンジする心が大切だと思いました。

わたしは今、学きゅういいんをやっています。二・三年生が同じ教室で勉強をしていて、じゅぎょう中みんなに声をかけなくてはいけないことがあるけれど、うまくつたわらないことがあります。そんな時、もう声をかけるのがいやだなと思うことがあります。でも、わたしの聲を聞いてくれている人もいます。これからも、うまくいかないことがあるかもしれませんけれど、あきらめないで、みんなをまとめていけるようにがんばりたいです。

主人公の加奈におじいちゃんは、

「しつぱいをだいじにして、大きくなってくれよ。」
とつたえていました。わたしもしつぱいを大事にしていきたいと思います。

だって、「しつぱいは、せいこうのもと」だから。
「しつぱいにかんぱーい！」

（『しつぱいにかんぱい！』宮川ひろ／童心社）

ぼくがまもる

米内沢小学校 三年 田崎陽也

ぼくは、「さん上！ヌンチャクゴリラ」という本を読みました。表紙のゴリラがヌンチャクを持つていたり、うちゅう人みたいな人がいたりして、どんなおもしろいお話なのかとワクワクしたからです。

この本は、小学校五年生のようじろうという男の子が主人公の物語です。ある日、ようじろうのお父さんは、うちゅう人が作ったゴリラバナナを食べて、ゴリラになつてしましました。ゴリラバナナで、人間をゴリラにしてしまおうとするうちゅう人をうちゅうに歸すために、ようじろうが、お父さんとうちゅうじいさんといつしょにたたかうというお話です。

ぼくがこの本を読んで一番心にのこつたところは、ようじろうの友だちがゴリラになつてしまつたところです。ずっとゴリラのままだつたらどうしよう、とドキドキしました。もし、自分の友だちがゴリラになつてしまつたら、すごくいやです。ようじろうの友だちは、さい後は人間にもどることができました。それは、ようじろうの友だちのことをとても大切にしていて、まもりたいと思つていたからだと思いました。

ようじろうが言つたダジャレで、うちゅう人のニヨルニヨルゾたい長が、大よろこびしているところはおもしろかったです。ぼくも読みながらちょっとだけわらつてしましました。そのダジャレのおかげで、ようじろうの友だちは人間にもれました。わら

いの力はすごいと思いました。ぼくも、まねをしてダジャレを考えたので、お父さんとお母さんの前で、

「アルミカンの上に、あるミカン。」

と言つてみました。お母さんがわらつてくれてうれしかつたです。うちゅう人をうちゅうへ帰すため、けいさつかんのお父さんが

考へた、ヌンチャクをまわしてうちゅう人を空へとばす方ほうが「ヌンチャクタイフーン」です。とてもかつこいいので、ぼくもまねしてみたいと思いました。ぼくは野球部で、いつもすぶりをしたりバッティングの練習をしたりしているので、バットをふるよう力強くふつてみたら、ぼくにもヌンチャクタイフーンができるような気がしてきました。

もし、ぼくがこの本の主人公だつたら、野球のバッティングを何回も練習するように、ヌンチャクもがんばつて練習して、ぼくがヌンチャクタイフーンでうちゅう人を空にとばしたいです。ようじろうやようじろうのお父さんが、ゴリラになつた人をぜつたいに助けたいと思つたように、ぼくも大事な家ぞくや友だちをぜつたに助けたいです。大事な家ぞくや友だちがこまつているときに、ぼくがまもつてあげられるように、心も体も強くなりたいと思いました。

(『さん上！ヌンチャクゴリラ』川之上英子・健／岩崎書店)

おばっちが教えてくれたこと

鷹巣小学校 三年 成田乙葉

おばっちと私は、にているところがほとんどありません。私は病気ではないので、入院もしていません。だれかのおばさんでもないし、お姉さんでもありません。それに、明るく元気なおばっちは、考えることもちがいます。だから、おばっちの行動で、すぐには理かいできなことがたくさんありました。

一番ふしぎだったのは、「くるしいよう!」「死にたくない！」ときの後に、ブイサインをしたことです。私がブイサインをするのは、写真のときの「ピース」だけなので、さいじょは意味が分かりませんでした。でも、何度もページを行ったり来たりして考えているうちに、おばっちがママっちを楽にするためにえんぎをしていたことに気がつきました。だからきっと、このときのブイサインは、メイに「大じょうぶ、これは作せんだよ」とつたえたかったのだと思います。病気の自分のことより、まわりのことを考えているおばっちは、強くてやさしい人だなあ。だんだんそんけいの気持ちがわいてきました。

やっぱり私は、おばっちみたいにはなれそうにないな。そう思いいながら読み進めていましたが、私にも一つだけ、おばっちとてあるまつていました。その理由が、私には分かります。きっと、大がまんをするところです。

おばっちは、病気で苦しいはずなのに、いつも明るく元気にふるまつっていました。その理由が、私には分かります。きっと、大

すきなママっちやメイに心配をかけたくなかつたからです。相手を大事に思えば思うほど、本当のことが言えなくなることもあるのだと、この本を読んではじめて気がつきました。

でも、それって本当にいいことなのかな。相手はうれしいのかな。私は、立場をかえて考えてみました。私がママっちやメイだったら、苦しいのをがまんしてわらつておばっちを見るよりは、いつしょに苦しんだり、はげましたりしてあげたいです。その方が、「本当の家族」という気がします。家族に心配をかけないようにする思いよりも大切だけれど、家族だからこそ心配し合うことも大切なのだと、この物語は教えてくれました。

おばっちは、最後にもう一度ブイサインをしました。ママっちにもうすぐ赤ちゃんが生まれるので、「おばっち二回目」という意味だそうです。病気でできないことがたくさんあるけれど、その中でも幸せや楽しみを見つけて生きていこうとしているおばっちは、やっぱりすごいなあと思います。でも、もしおばっちに会えたなら、ときには「くるしいよう!」「死にたくない!」つてさけんもいいんだよ、とつたえたいです。

私も今はなやみはないけれど、これから大きなかべにつき当たるかもしれません。そのときは、家族に相談して、たくさん心配もしてもらいたいです。その中で、自分にできることを見つけて、進んでいこうと思います。

(『おばっちのブイサイン』後藤みわこ／くもん出版)

〈特選〉

ぼくが知らなかつたゴミの話

鷹巣小学校 四年三浦歩夢

学校の社会科見学で、リサイクルセンターへ行くのをぼくはとても楽しみにしていた。しかし、体調が悪くその日は学校を休んでしまい、社会科見学へ行けなかつた。そんな時に図書館で「すごいゴミのはなし」という本を見つけ、読んでみることにした。

この本には、「ゴミ清そう員の仕事についてや、ゴミを集める時に感じていること、ゴミを分別して捨てるの大切さ、そしてゴミに関する問題についてとても分かりやすく書かれていた。清そう員の仕事は清そう車でたくさんのゴミを、一日六回も清そう工場へ運んでいるそうだ。清そう車一台に、ゴミをパンパンにつめたらアジアゾウのメスと同じになるそうなので、毎日たくさんのが捨てられていることが分かる。ぼくはゴミをなるべくへらすことが必要だと感じた。

また、この本を読んで初めて知つたことは日本は中国とアメリカに続いて世界で三番目に食べ物を捨ててている国だということだ。この本には、くさつて食べられなくなつたものだけではなく、まだ食べられるものもたくさん捨てられてしまつていることが書かれていた。ぼくが、お母さんと一緒にスーパーへ買い物に行くと、値引きシールのついたお肉を買う時がある。安いから買つているのだとぼくは思つていたが、それは食品ロスをへらすために、大

切なことをしているのだと気付いた。

そして、ぼくがこの本を読んでおどろいたことは、このままの量のゴミを燃やし続けると、およそ二十年後にはゴミのうめ立て地がなくなるということだ。清そう工場で燃やされたゴミは、元の大きさの二十分の一の量の灰になり最終処分場に集められるそうだ。元の量よりへるとはいえ、このまま同じ量のゴミを燃やし続けると、ぼくが大人になるころには最終処分場が灰でいっぱいになり、ゴミが捨てられなくなるようだ。そしてそうならないためのかい決方法がまだ考えられていないことを知り、ぼくはしょう来、ゴミはどうなつてしまふのだろうと心配になつた。

ぼくは、まだかい決方法が考えられないのなら、ゴミを少なくするために、今自分ができることをしようと思った。例えば学校で給食の時間が終わるとみんなの残した給食がたくさん食缶へ集められている。ぼくはなるべく残さずに食べて食品ロスをへらすように心がけたい。また、ゴミを捨てる前に、それがリサイクルできるのかどうかをたしかめて、ゴミの分別をしたいと思つた。

ぼくができるることは、日本の全てのゴミの量に対しても、ほんの小さなことかもしれないが、ほんの小さなことでも続けることで、何かが変わっていくかもしれない。しょう来の日本でゴミの問題がかい決されることを願つて、今、ぼくがゴミをへらすためにできることをせいいっぱいやつていきたい。

（『すごいゴミのはなし～ゴミ清掃員、10年間やつてみた。』）

滝沢秀一／学研出版

〈入選〉

水族館の飼育員さんはすごい！

義務教育学校阿仁学園 四年 片岡恵愛

私は、水族館が大好きです。いろいろな動物に会えるし、見ていてとてもいやされるからです。今年の夏休みに家族で行つた名古屋でも、水族館に行つてきました。

私は、家で犬を二ひきかっています。とてもかわいいけれど、遊びのつもりでかんだり、ひつかいたりしてくることがよくあります。やんちやすぎて、お世話につかれたなと思うこともあります。でも、名古屋の水族館で見た飼育員さんたちは、いつ見てもここにこしていました。あんなに笑顔でいられるなんて、きっと楽しいことばかりなのだろうな、どんな仕事をしているのだろうと気になりました。そこで、この本を読んでみることにしました。

本を読み進めていくと、海の動物たちの特ちようや生たい、かわいいところがたくさん書かれていました。でも、それだけではありませんでした。

私がこの本を読んで一番感じたのは、飼育員さんの仕事の大変さです。水族館での主な仕事は、動物たちへのえさやりとそうじ、シヨーの練習、それから体調管理だそうです。犬のお世話と似ていますので、だいたい予想通りでしたが、その中でとてもおどろいたことがあります。それは、えさの量です。例えば、イルカは毎日一頭で十五～二十五キログラムのえさを食べるそうです。よくテレビでは、芸能人やスポーツ選手が、器からはみ出るほど大盛りの料理を食べているのを見かけます。それでも、一人三キロく

らいなので、イルカの食べる量がいかに多いかがわかります。ということは、飼育員さんは毎日二十五キロ分の魚をさばいでいることになります。水族館にいる他の動物たちのえさも合わせて毎日用意するなんて、想像できないぐらい大変なのだろうと思いました。

また、動物たちも私たち人間と同じで、一人一人せいいかくがちがうことが分かりました。いたずら好きの子、おとなしい子、甘えんぼうの子。いろいろなタイプの動物がいるのが学校みたいだなと思いました。その中で一人一人に合う方法を考えてせつしているのです。水族館で見る動物たちは、どの子も生き生きしています。きっと、大変な中がんばる飼育員さんの優しさが通じて、動物たちとの間にきずなができるているのだと考えました。

動物たちのお世話は、私が思つていた以上に大変だと分かりました。でも、この本に登場する飼育員さんや名古屋で出会つた飼育員さんは、みんな笑顔でした。どうしてこんなに笑顔でいられるのだろうと考えました。それはきっと、動物たちのことが大好きだからだと思います。本当は苦労することも多いはずなのに、それをお客さんには感じさせない笑顔が、とてもすてきだなと思いました。しよう来私も飼育員の仕事をやつてみたいと感じました。私の家の犬も、二ひきともせいかくが全くちがいます。大変なこともあるけれど、これからは私も飼育員になつたつもりで、笑顔をたやさないでせつしたいです。

(『飼育員さんひみつおしえて！ みんなわくわく水族館 海の動物いっぱい編』竹嶋徹夫 監修 池田菜津美文／新日本出版社)

〈入選〉

みんななかよし

米内沢小学校 四年 近藤彩蓮

わたしは「それでいい」という本を読みました。この本を選んだのは、何が「それでいい」のか気になつたからです。

この本は、絵をかくのが大好きなきつねと心のやさしいうさぎが主人公の物語です。わたしが、この本を読んで心にのこつたところは、うさぎがきつねにやさしく声をかけた場面です。きつねは、うさぎに声をかけられるまで、上手な絵をかくことができるか、不安でした。しかし、声をかけられたことで、やる気を出し、みんながおどろくような絵を完成させました。このときのきつねは「やつたぞ！」というよろこびの気持ちでいっぱいだったと思います。また、声をかけたうさぎもいっしょによろこんでいて、うさぎのやさしさに心をうたれました。

この本を読んで、自分もうさぎのようにやさしく人にせつしたいと思いました。わたしは、なかのよい友だちや下級生にやさしくせつすることができますが、姉にはやさしくせつすることができます。その理由を考えると、姉に対して、ゆずりたくない気もちや負けたくないという気もちがあるからだと思います。ひどいことを言つた後の姉の悲しい顔を見ると、わたしは後かいの氣もちで心が苦しくなります。「次はやらない」と心に決めていても、やはり、姉をたたいたり、ひどいことを言つたりしてしまいます。わたしは、これからも「やさしくしたいのに、やさしくできない」という気もちと戦い、姉にやさしくできるようにならなければなりません。

りたいと思います。

わたしはこの本を読んで気づいたことがあります。それは、みんなが思いやりをもつていれば、けんかすることなく、生活することができるということです。お互いの意見が食いちがい、イライラをぶつけ合ふと、けんかはエスカレートします。どちらかが、相手のことを考え、ゆずつたり、言いたいことをがまんしたりすれば、相手もそれに気づき思いやりをもつてくれるはずです。そうすると、けんかはなくなります。わたしは、けんかにならないように、先に相手に思いやりをもつてせつしていきたいと思います。

最後に、わたしはこの本を読んで、結局何が「それでいい」のか分かりませんでした。夏休みが終わつた後、先生に聞くと「自分が好きなことは、うまくいくても、うまくいかなくとも、楽しむことができれば、『それでいい』ということではないか。」と教えてくれました。わたしは、図画工作科の絵をかく時間に、なつとくする作品ができなくて、絵をかくという好きなことを楽しめずに、終わつてしまつたことがあります。しかし、この本を読んだり、先生の話を聞いたりして、「楽しむことが一番だ。」という大切なことに気づきました。これからは、「楽しめばそれでいい」という、前向きな気もちをもつて、生活していきたいと思います。そして、好きなことを楽しめていない友だちにこのことを伝えていきたいと思います。

(『それでいい!』 磯みゆき／ポプラ社)

勇気とやさしさのビザ

綾子小学校 四年 米倉道親

ぼくが「六千人の命を救つた外交官杉原千畝」の本を読んでみようと思ったのは、図書室でこの本を見つけて、主人公の杉原千畝さんはどんなことをした人なのかと気になつたからです。

杉原千畝さんは、今から八十年くらい前にヨーロッパにあるリトアニアという国で働いていた日本人です。リトアニアでは、日本本の代表として、外国人とお話ををする仕事をしていました。

当時のヨーロッパでは戦争が始まつていて、ユダヤ人をいじめたり差別したりする、ナチスという人たちがいました。ナチスは、自分たちが一番えらいのだとまちがつたことを信じていて、昔から神様を大切にしてきたユダヤ人をきらつていたのです。そのため、たくさんのユダヤ人が自分たちの国にいることができなくなつてしまい、逃げようとしていました。逃げるためには、「ビザ」という特別な紙が必要でした。ビザは、他の国に入ることをゆるしてもらうための証明書のようなもので、ないと入国することができなかつたからです。

千畝さんのところに、たくさんのユダヤ人たちが「ビザをください！」とお願いしにきました。しかし、当時の日本はナチスが治めるドイツと国どうしで協力し合っていたので、ナチスの方に反対するようなことはできませんでした。日本せい府は、千畝さんに「ビザを出してはいけません」と命令しました。もし、千畝さんが命令にからつてビザを出したら、お仕事を辞めさせ

られてしまうかもしれません。しかし、ビザを出さなかつたら目の前のユダヤ人たちは死んでしまうかもしません。ユダヤ人たちの悲しそうな顔を見て、千畝さんはとても悩みました。悩んだ末に、千畝さんは、「困つている人を助けたい！」と思い、一人でビザを書き始めたのです。

この本を読んで、ぼくは、胸が熱くなりました。たくさんの命を助けるために、千畝さんがたつた一人で勇気を出して行動した姿が本当にすごいと思つたからです。千畝さんは手が痛くなるほどたくさんビザを書きました。電車に乗りながら、窓から身を乗り出してでも書き続けたそうです。そのビザのおかげで、六千人の命が助かつたといいます。せい府に言われたとおりにしたら楽だつたはずなのに、困つている人たちのために、自分の気持ちに正直に行動した千畝さんのやさしさにも感動しました。

ぼくも、千畝さんのように、まわりの人を大切にできる人になりたいです。例えば、友達が悲しそうにしていたらそつと声をかけてあげたり、一人でいる子がいたら進んで、「いつしょに遊ぼうよ」と誘つてあげたりしたいです。勇気とやさしさがあれば、だれかを助けて笑顔にすることができるとこの本が教えてくれたので、いつも「勇気とやさしさ」をもつて生活したいと思います。

（『六千人の命を救つた外交官 杉原千畝』

渡辺勝正・あべきより／小学館）

〈入選〉

「クジラと海とぼく」を読んで

米内沢小学校 五年 羽 場 大 耀

この本を取ったときに、表紙に大きなクジラが描かれていました。筆者の水口さんと海やクジラと、どんなつながりがあるのかを知りたくて読もうと思いました。

水口博也さんは、水中カメラマンです。母親の実家が徳島県の海辺の町だったので、幼い頃からよく貝やカニなどの生き物を探して遊んでいました。小学生になると、水中メガネをつけて川や海の中をのぞき込むようになります。次第に水中をのぞき込む楽しさを覚えるのでした。泳ぎがあまり上手ではなかつたので、海に行つたときには浮き輪につかりながら海の中をのぞいていました。泳ぎが上手になると、足ヒレやスノーケルを付けて海中探検を楽しむようになります。また、本や写真を見ながら海の生き物も勉強し始めるのでした。そこで、水中でイルカやクジラの写真を撮つてみたくなるのです。

ぼくは、水口さんが海の中でクジラと出会う場面を読んだ時に、クジラはとても大きくて力強いのに、なぜか安心できる動物だと思いました。また、あの広い海の中を泳いでいるので、ぼくたち人間よりはるかにいろいろな世界を知つているような感じがしました。

水口さんとクジラが海の中で一緒に泳ぐところがありますが、

二人は言葉を交わすことはできませんが、不思議と心が通じ合っているように思いました。クジラからすると敵ではないという安全感があるのだと思います。水口さんに攻撃をせず、なかよく泳いでいる場面はとても感動しました。

海は、おだやかで優しく見える時もありますが、大きな音を立てながら波が高くなると怖さもあります。そんな広い海の中には、たくさん生き物が生活をしています。海の中の生き物は、海の中で生きていくために必死になつて身を守りながらがんばつています。自然の中で生きるために、厳しい条件を何度もクリアしていかなければならぬからです。人間は、果たしてあの海の中で生きていいけるのだろうかとぼくは考えていました。

ぼくが、この本を読みながら考えたのは、海の生き物が絶滅してしまうたらどうなるのだろうかということです。砂浜に行くとたくさんゴミが捨てられているのを見かけます。もしかすると、川や海にいろいろな物を捨てている人がいるのかもしれません。そういう積み重ねが自然を破壊し海の生き物の命まで奪つてしまふことがあります。必死に生きていくこうとする海の生き物のために、自分ができることは何かなどもう一度考えてみたくなりました。水口さんと一緒に泳いだクジラは、海を大事にする、自然を大事にしてくれている人間がいることに、もしかすると気づいていたのかもしれません。この本を読んで、自然は人間の力でしつかり守つていかなければならぬことを学びました。

(『クジラと海とぼく』 水口博也／アリス館)

小学6年生の部

〈入選〉

少数派になる勇気

清鷹小学校 六年 中嶋 真悠

みんなは思ったことを何でも話しているのかな。一人一人の意見が大切と言うけど、他の人とちがう意見をもつということは、少数派になるということだ。少数派は少し心細い気持ちになる。正直にいうと、ぼくは自分がどちらかと言えば少数派だと思う時は、つい多数派に話を合わせてしまうことがある。自分にうそをついている感じはするんだ。だけど、がんばつて自分の気持ちを守るより、不安定さとか圧力を感じなくてすむ多数派の心地良さを選びたい時もあるんだ。それでも、少数派の考えを聞いて、なるほどって思うこともあるし、その意見を尊重してあげたい気持ちにもなる。そして最後は、みんなの雰囲気が悪くならないように、うまくまとまればいいなって思う。けれどこの本を読んで人とちがう意見をもち、それを伝えることが人類の発展につながってきたことを知った。つまり少数派は大切で、必要とされる存在なんだ。

人類は、それぞれの場所で協力して生活をするとになると、お互いの考え方を結びつけるために、神話や宗教といった、みんなが信じる物語を語るようになる。そして、言語や文化、宗教が違う人間が、何かの理由で国を出て出会い、また新しい文化が生まれた。それは良い出会いとはならず、争いに変わる時もある。

信じるものがあがうと、どうしても一つの考えにまとまらないからだ。そんな悲しい歴史もあるけれど、考えのちがう人間同士の出会いには、きっとためらいや迷いがあつたはずだ。それまで行われてきたことを多数派とすれば、新しいことを受け入れるのは、きっと少数派だつたにちがいない。少数派の長い年月にわたる勇気が作りあげたことだとも言えると思った。

前に、授業中に先生がぼくの意見を取りあげてくれて、みんなの前で発表したことがある。自分の考えを言うのは、とても緊張する。正しいのか、まちがっているのか、みんながどう思うのか。でも先生から、

「あなたの考えが、みんなの考えを深めてくれたよ。ありがとう。」といつてもらつて、とてもうれしかった。もしかしたら、ぼくが自ら少数派になる勇気をもてば、みんなの力になれる機会が増えるかも知れない。

今は多様性を受け入れることが大切だとと言われている。ぼくはそれを、他の人と違う人を守るため、思いやるために受け入れようという意味だと考えていた。ずっと少数派を弱い立場の人と思っていたのだ。けれどこの本を読んで、支持者が少なくとも声をあげる人がいるから、現状がより良くなつたり、問題が解決したりするようになるのだと思った。今ある状況を変えてきたのは、いつだつて少数派の努力だつたのだ。

ぼくは、自分の意見が大切なことだと信じた時は、周りの人や未来の人のために、しつかりと伝えていく人になりたい。
『人類の物語 Unstoppable Us 世界はちがう人どうしでできて
いる』 ユヴァル・ノア・ハラリ／河出書房新社)

〈特選〉

人を見つめたい

鷹巣中学校 一年 堀内希咲

自分では気付けない自分の良さがある。私が憧れるあの子には、あの子にしか分からぬ悩みがある。この物語を通して、新しい視点で自分を見つめることができた。

物語の主人公田中ひとみは、周りを気にして本音を話せずに過ごしていた。そんなひとみは、自分の意思をハツキリ言う学校一の美少女柳田しづかに憧れていた。ある夜、塾からの帰り、偶然しづかと出会った。そこにクラスの嫌われ者の押川さんが乗る車が突っ込んで、ひとみ、しづか、押川さんの三人は入れ替わってしまったのである。

私は、私を受け入れてくれた友人たちに助けられ励まされ、勇気をもつことができた。では、その友人たちはどうなのだろうか。話をたくさん聞いてくれて、褒めてくれた友人たちに悩みはなかったのだろうか。だから、私は私を受け入れてくれた友人たちに、同じことがしたい。悩みを聞いたら助けられるかもしれない。力になれるかもしれない。

なぜしづかは嫌われ者の押川さんになりたかったのか。なぜ押川さんはこんなわたしになりたかったのか。憧れのしづかになつたとき、いろいろな人が優しくしてくれた。たくさん話しかけてくれた。想像どおりの幸せな生活。けれど、多くの人に気を遣い遣われ、いつも疲れていた。続いてひとみは押川さんになつた。みんなが嫌う押川さんである。でも、ひとみが気付かなかつたたくさんの良さがあった。周りにどう思われるかばかり気にして、大切な人を傷つけていることにも気付いた。ひとみは、自分の姿では言えなかつた本音を周囲にしつかりと言い、最後にはあれほど嫌っていた押川さんを助けようとした。

私は最初、この子たちのように憧れのあの子に入れ替わられたら、どれだけ楽しいだろうか、幸せだろうかと思つていた。しかし、物語が進むにつれて、あんな人気者のしづかでも悩んでいるんだ、あんなに嫌われて嫌がらせを受けている押川さんでも教室の隅で楽しんでいたんだ、と気付いた。新しい視点をもつことで、その人の悩みや楽しさ、良さがだんだん明らかになつていくように感じた。そして、物語が進むにつれ、だつたら私はどうなんだろう、と考えるようになつていった。

中学校という新しい環境。最初は慣れるのが難しかつた。それまで受け入れてもらつていた私。でも中学校に入つて、自信があつたことや得意なこと、好きなことを否定されたこともあつた。もちろん受け入れてくれる人も大勢いた。様々な人と関わつていく中で、私が今まで気付いていなかつた自分の良さや得意なことが見えてきた。

私は、私を受け入れてくれた友人たちに助けられ励まされ、勇気をもつことができた。では、その友人たちはどうなのだろうか。話をたくさん聞いてくれて、褒めてくれた友人たちに悩みはなかったのだろうか。だから、私は私を受け入れてくれた友人たちに、同じことがしたい。悩みを聞いたら助けられるかもしれない。力になれるかもしれない。

ないのだから。

だから私は、様々な視点から人と関わっていきたい。ひとみのように、その人の初めて見る一面が見られるかもしないから。新しい気付きがあるかもしないから。その気付いで、更に仲良くなれるかもしないからだ。

私はこの物語から気付きを得た。人から見た自分は「私が思っている自分」とは違う。私が「自分はこうだ」と思つていても、他の人の目には違つて映る。自分が得意だと思つていたことも、得意には見えないかもしない。逆に苦手だと思つていたことが、他の人には得意そうに見えるかもしない。そんな相手の視点も大切にしていきたいと思う。

人は、自分も相手の内面も簡単には理解できない。その人の本当の願いは、予想とかけ離れているかもしない。だから、私は人をいろいろな視点から見つめ、深く関わり合いたい。自分と相手を理解していきたい。

(『もしもわたしがあの子なら』ことさわみ／ポプラ社)

〈入選〉

「違ひ」が希望になる

鷹巣中学校 一年 佐 藤 あおい

人には、その人にしかない見方や考え方がある。一人一人「違い」がある。違いをもつた人が集まつて、一つの目標に向かうのが駅伝だ。私は駅伝が大好きだ。選手として駅伝を走つたことも

何度かある。そのときは、メンバーが一つの目標に向かつてがんばるのは、当たり前だと思っていた。この本「あと少し、もう少し」を読むまではそう思つていた。

この本は図書室の本棚で見かけた。表紙には、ユニフォームを着て走る、中学生くらいの男子数人が描かれていた。たすきを手にして振り返つている人もいる。タイトルはどういう意味なのか。どんなときに誰が思つた言葉なのか。私は本を手に取つた。

市野中学校陸上部を毎年県大会に出場させていた顧問の先生が異動になり、代わりに頼りない先生が来た。部長の舛井は、中学最後の駅伝に向けて、同じ陸上部の設楽、俊介とともにメンバーを集め始める。内気な設楽、不良の大田、頼みを断れないお調子者のジロー、超然とした渡部、舛井に憧れる俊介。各区間六人の視点で物語は進んでいく。寄せ集めのバラバラな六人が県大会出場を目指し、あと少し、もう少しひと、みんなと走るために全力でたすきをつなぐ。

人には、人の数だけものの見方や考え方がある。六人は本当にバラバラだつた。ましてや県大会出場という目標を全員が最初からもつっていたわけではない。それなのに、どうして少しでも長く、みんなと走ろうと思ったのか。全力でたすきをつなごうと思つたのか。どうして彼らの心はつながつたのか。ページをめくるたびに、六人の思いは重なり、深まつていった。私は物語にのめり込んでいった。

不良でやる気を感じられない大田。本当は自分や相手と向き合つて戦おうとする強い気持ちと、繊細で敏感な心をもつ人だつた。言いたいことをはつきり言い、みんなに嫌がられてしまいやすい渡部。実は人一倍優しく、他人に気配りができる人だつた。

榎井はいつも前向きで、空気を読むことができ、メンバー集めでも部長として引っ張ってきた。しかし、自分の代で県大会出場の伝統を絶やはならないという重圧を、一人で背負っていた。同じ場面が六人の視点で描かれていたから、私は彼らの内面を知ることができた。

けれど、どうだろう。物語でも現実でも、相手の心の深いところは、相手が話してくれない限り分からぬ。それでも、六人の気持ちも目指すものも一つになつたのは、六人がバラバラだったからだと思う。それそれがそれぞれのやり方で相手を思い、考えた。その結果、すれ違いが起きることもあつた。しかし、互いが寄り添い、相手を理解しようとしたから、心も目標も一つにできただのだ。

彼らを見て知つた。当たり前だと思つていたことは、本当はとてつもなく価値のあることだつた。それそれが違う見方や考え方をもつからこそ、「希望」があると知つた。私が経験した駅伝は、彼らほど複雑な事情が絡み合つていたわけではない。けれど、それぞれ不安を抱え、つらい練習メニューの中でくじけそうになつた。それでも、心を一つにして目標を達成できたのは、物語の彼らと同じように、自分とは違う立場の人が寄り添い、励まし合つたからだと思う。これは駅伝に限らない。一緒に何かを成し遂げた時も一緒だ。つらく苦しいとき、自分とは違う人同士だから、手を取り合つて明るい方へと導き合つていけるのだ。

私たちは、誰もが自分という一人の人間である。私とあなた、私と友達、みんな違う。だから、自分一人で乗り越えられない高い壁も、あらゆる視点から思いが集まることで、乗り越えられる。自分と全く違う考えの人がいて、意見がぶつかつたとしても、自

分とは違う人なのだからしかたがない。そんなときは、相手の意見を否定するのではなく、話し合い、寄り添い、認め合うことが大切だ。これからは「違い」にこそ希望をもちたい。

(『あと少し、もう少し』瀬尾まいこ／新潮社)

〈入選〉

よりよい人生を送ること

鷹巣中学校 三年 庄 司 心 優

森繪都さんの「カラフル」を読んで、私は人間の弱さについて深く考えさせられました。

この物語は岡島大樹という少年が自分の命を絶ち、死後の世界で抽選に当たり他の少年大須藤幸太郎の体を借りて再び生きるチャンスを与えられるという不思議な設定です。最初はファンタジーのような設定に驚きましたが、物語を読み進むにつれて自身のこととして受けとめられるリアルな物語だと感じました。そして、大樹の姿を通じて生きることについて多くのことを学びました。

物語の冒頭、大樹は自ら命を絶つてしまします。彼は学校でうまくいかず、家庭でも問題を抱えており自分が自信を持てずに孤独を感じていました。自分の存在に意味を見出せず、死を選んだ彼の気持ちは私にとってとてもリアルでした。誰しも一度は悩み苦しみを抱え、絶望に感じることがあると思いますが命を絶つという選択に至ることの重さを改めて感じました。私は大樹のよう

に生きる意味が分からないと感じたことはまだありませんが、自分に自信がもてないことはたくさんあります。私たちは生まれてからずっと他者に優しくしなさいと教えられ生きています。その一方で、不甲斐ない自分も認め自分に優しくしなさいと教えてくれることは少ないのでないかと感じます。他者は許ることも自分自身を許すことは難しいです。何でも器用にこなし、自分がかつこいいと思える姿に誰しも憧れていると思います。その気持ちが大きい分、不器用でかつこ悪い自分が出てきたとき、すごく自分はちっぽけな人間だと感じることが多いです。自分と他者を比べ劣っていることがつかりし自己肯定感が下がります。それが積み重なり自分の存在価値に意義を見出せず自ら命を絶つてしまう人もいるのではないかと考えさせられました。駄目な自分も許し、命を大切に前に進んでいくことの重要性を痛感しました。

私が特に印象にのこったのは幸太郎の母親との関係です。母親は息子の死を深く悲しみ、自分を責め続けています。大樹は最初その母親の苦しみを理解できませんでしたが、次第にその心情と共に感し始めます。この過程を通じて、大樹は他人の痛みを理解し、自分を犠牲にしてでも他人を助けることの大切さを学びます。このシーンは私にとっても大きな学びでした。それは、自分の命でもそれは母親からもらつた命で大きくなるにつれて周りの人達とも関わりが増え自分一人の命ではなくなるということです。私たちも、他人の痛みや苦しみを理解しようとする姿勢が必要だと感じました。物語が進むにつれて大樹は自分の命の重さに気付いていきます。最初、大樹は生きる意味がないと感じていましたが幸太郎の体を借りて過ごすうちに命を大切にするべきだと心から思えるようになります。大樹は自分の命を大切にしなければならな

いと気付きます。彼は他人の命がどれだけ尊いものであるかを実感し自分の命をもつと大切にしようと決意します。私もこの部分を読んで命がどれだけ貴重なものなのか、そして生きていることがどれだけ素晴らしいことなのかを改めて感じました。普段は当たり前のように思ってしまう命ですが、それが無くなることの恐ろしさを知ることで、私たちはもつと毎日を丁寧に生きるべきだと感じました。

「カラフル」を通じて私は生きることの意味や命を大切にすることの重要さを深く考えさせられました。大樹が他人との関係を通じて成長し、命を大切にするようになる姿に私は強く感動しました。この本を読んで、日々の生活の中で当たり前に感じている命が、実は非常に重要なことに改めて感じました。これからは、どんなに小さいことでも感謝し命を大切にしながら毎日を過ごしていきたいと思います。そして自分を受け入れ、他人を思いやることで、より良い人生を送ることができると信じています。

(『カラフル』森絵都／文藝春秋)

優しさの形

〈入選〉

鷹巣中学校 一年 鈴木萌生

私はこれまで、医師とは大勢の患者さんを効率よく診て、迷わず判断できる人だと思っていました。しかし、この作品に登場する諫訪野先生は、患者さんへの優しさをもち、行動一つ一つが丁

寧な人でした。新米で自信がなく、迷いの多い人でしたが、自分にできることを見つけ、一つずつやり通していく姿がとても格好良く見えました。

特に感動したのは、先生が患者さんの話をよく聞き、最後まで寄り添う場面です。患者さんの言葉や仕草、事情の変化まで注意深く見て、それをカルテに細かく記録します。ただのメモではなく、この人をもっと理解したいという気持ちが込められていると感じました。このカルテを書くことこそが、諏訪野先生の「祈り」なのではないかと思いました。

手術をしたくない患者さんに対しても、先生は諦めず、何度も話を聞き、理解してもらえるように少しづつ歩み寄っていきます。その姿は私が思っていた医師像とは違い、人間らしく、温かいものでした。医師という職業は、知識や技術だけでなく、人の気持ちに寄り添う力も必要なのだと改めて感じました。

私は今の自分自身を振り返ってみました。私は、どうすればいいか考えることはあっても、実際に行動に移すのが苦手です。友達が困った表情をしているとき、心中では「何かできることはないか」と思います。けれど、その場では声を掛けられないことが多いです。授業中の発表も、緊張してしまうので、なかなか手を挙げられません。

でも、諏訪野先生のように、今の自分にできることを探して実行するのは、私にもきっとできるはずです。例えば、部活動でうまくいかず落ち込んでいる仲間がいるとき、直接励ますのが難しければ、さりげなくそばに居たり、後で「一緒に練習しよう」と誘つたりする。そんな小さな行動が優しさにつながるのだと思いました。私はコツコツ取り組むタイプのようなので、大きなこと

はやれなくても、少しづつを積み重ねていけば、必ず誰かの力になれると思います。

また、この作品は大切なことを教えてくれました。人の話を素直に最後まで聞くこと。自信がなくても、自分にできることを探してやり通すこと。人と接するときに、話を聞いてあげたり、一緒に考えたりすることが優しさにつながること。これらの教えは、日常生活でもすぐに生かせるものです。家族との会話でも、相手の話を途中で遮らずに最後まで聞く。友達が悩んでいるときに一緒に考えてみる。身近な場面で実践できる機会はたくさんあります。

私は更に、この作品を通して「優しさとは何か」を深く考えようになりました。相手に親切にすることだけが優しさではない。その人の気持ちを理解しようとする姿勢や、相手の立場に立つて考えることから、優しさは始まっていると思います。友達が悩んでいても、無理に励ますのではなく、そばにいて話を聞くだけでも、相手にとつて大きな支えになるかもしれません。

そして、行動を起こすことの大切さも強く感じました。考えているだけでは何も変わらない。勇気を出して一步踏み出すことで、自分自身も成長できるし、周囲の人にもよい影響を与えることができると思います。私はこれまで、失敗を恐れて行動をためらうことが多くありました。けれど、この作品を読んでからは、失敗してもいいからやってみようと思えるようになりました。

諏訪野先生が一人の患者さんに集中し、相談し、カルテを書き続け、最後まで寄り添ったように、私も身近な人たちを大切にしたいです。考えているだけでなく、勇気を出して行動を起こせるようになります。すぐに結果が出なくても、誰かの心に届くよう

な行動を続けていくことが、私の目指す優しさの形なのだと思います。その小さな積み重ねが、私なりの「祈り」になると信じています。

（『祈りのカルテ』 知念実希人／KADOKAWA）

高校・一般の部

〈特選〉

「神さまを待つてゐる」を読んで

成田洋子

この本を読んで、一番印象に残っているのは「貧困というのは、お金がないことではない。頼れる人がいないことだ」という主人公水越愛の言葉だ。

未婚で、ずっと非正規雇用で働いている私は、自分の事を極貧であると思っていた。

しかし、実家に住み、親戚から米や野菜をもらっているのだから、貧困とまでは言えないのかもしれない。

水越愛は派遣切りにあり、家賃が払えなくなり、ネットカフェに寝泊まりするようになる。初めは工場などの日雇いバイトをするが、

「君、大学出てるんでしょ？ 卒業後は何してたの？ 大学出てるのに、バカなの？」

などと言われ、肉体労働のわりに低賃金である為、勧誘された出会い系のバイトをするようになる。日雇いバイトに比べて高収入なので徐々にはまっていくが、職業差別が生じ、いつまでもこのような仕事をしていてはいけないと悩むようになる。

私は水越愛の気持ちがとてもよく分かる。私は今まで工場、清掃、飲食店など色々なバイトをしてきた。何度か
「鳳鳴高校出てるのに、なんでこんな所で働いているの？」

と言わされた事がある。出会い喫茶の経験は無いが、クラブやスナックでのホステス、コンパニオンのバイトをした事もある。そ

の時は私も職業差別が無かつたとは言えない。私はお金がないから仕方なくこの仕事をしているだけだ。この業界に好きでいるわけではない。と強く思つていた。

しかしその一方で、自分の母と姉が、水商売を見下しているような会話をした時は、そういう仕事を一生懸命頑張つている人もいるのだから悪く言わないで欲しいとも思つた。

水越愛は、窓の外をずっと見ていると、街を歩く人たちをうらやましいと思う以上に、死にたくなつてくる。そんなことを考えてはいけないとわかつていても「お腹すいた」と感じるくらいの気軽さで「死にたい」と感じる。

私も全く同じだ。仕事がなかなか見つからない時、面接を受けても落ちてばかりの時、仕事をしていても辛い時、自分以外の人には全て順調のように見え、自分は何をしているのだろう。どうしてこんな人生になつてしまつたんだろう。とみじめな気持ちになり、自分を責め、早く寿命が来ないだろうかと思つてしまう。

私の場合は本を読む事で現実逃避をしたり、登場人物に自分を重ねて共感したりする事でなんとか生きているが、人間には話を聞いてくれる人、頼れる人が必要なのだと思う。

幸い、水越愛には市役所福祉課勤務の同級生がいて、相談にのつてもらつたり、仕事を紹介してもらつたりして、新しい生活が始まる。

本のタイトルにある「神さま」とはこの同級生の事であるが、もう一人「神さま」がいて、それは水越愛以上に酷い家庭環境の中で育ち、体を売つてている少女の事であつた。水越愛は少女を救

う事で自分も救われるのだという。

私はまだ誰かを救いたいと思う余裕はないが、そう思える人がいると生きる希望を持てるのかもしれない。

水越愛はこう考える。「生活をするために、お金は必要で、軽く考えない方がいい。けれど人生には、もつと大切なものがある。そのことを忘れてしまうと、お金も入つてこなくなる気がする。命を守るためにお金であり、お金を稼ぐために生きているわけじゃない」その通りだと思った。この本に出会えて、水越愛に出会えて本当に良かった。

この本を読んで思い出した事がある。私は若い頃約二年間外国に住んでいた。楽しい思い出がたくさんあるが、一度だけ辛い思いをした。ボンド詐欺にあい、お金を払つたのに住む所が急になくなつたのだ。その時真っ先にかけつけてくれたのが某商社の部長だった。そして

「金は大丈夫か？金ならいくらでも貸すぞ。金が無いからって体を売るような事は絶対にするなよ。」

といつてくれた。私は泣きそうになつた。他の商社勤務の男性も奥さんを説得して自宅の一部屋空けたので、その部屋にすんでもいいと言つてくれた。友人達も

「うちのリビングに住まない？」

と言つてくれた。身内が一人もいない外国で私を心配してくれ、助けようとしてくれた人達がいた事は大変ありがたく幸せな事だつた。

自分自身にも、水越愛のような経験をしている人達にも言いたい。
「裕福でなくてもいい。なんとかなるから、とりあえず生きてい

こう。」

と。

『神さまを待つて』 畑野智美／文藝春秋)

〈入選〉

君に伝えたいことがある

成田八千代

一月二日、午前八時。東京箱根往復大学駅伝競走は、東京大手町にある読売新聞本社ビル前をスタートする。寛政大学の黒と銀のユニフォームを身に付けた走者は、柏崎茜。アパートの室内に天井近くまでぎっしりと漫画が積まれ、布団を敷くスペースがないため、毛布にくるまつて寝る漫画オタク。走ることのない生活を送っていたのに、「漫画を捨てるか、ともに箱根駅伝を目指すか、どっちがいい?」と清瀬に脅され、まきこまれたのだ。

清瀬灰二是陸上選手だったが、高校の時の膝の故障のため、駅伝の名門である六道大学の推薦を断り、一般入試で寛政大学に入つた。大学から徒步五分の「竹青荘」に住みながら箱根駅伝出場を狙っていた。万引をして逃げる藏原走の走りに目を奪われ、彼を「竹青荘」に招き入れたことから、彼の野望は動き始める。これまでの住人たちも知らなかつたが、「竹青荘」は寛政大学陸上競技部練成所で、大家の田崎源一郎が監督だという。

一〇二号室、岩倉雪彦は法学部四年。既に司法試験に合格した秀才。

一〇三号室、藏原走は中学時代から走っていたが、高校陸上部で暴力事件を起こし、退部となる。寛政大社会学部一年生。

一〇四号室、平田彰宏は「ニコチャン」というあだ名で呼ばれ、陸上経験はあるが二浪と留年で二十五歳のヘビースモーカー。

二〇一号室は、双子の城太郎と城次郎の一年生。高校時代はサッカー部。

二〇二号室の坂口洋平は社会学部四年。ビデオに録画してまでクイズ番組を見るキング。

二〇三号室のムサ・カマラは理工学部二年のアフリカ出身の留学生。陸上とは無関係。

二〇四号室が「王子」こと柏崎茜、一〇一号室が清瀬灰二で朝晩の食事を作り、住人たちの健康管理をしている。文学部四年で大学最後の箱根にかけている。

清瀬の言葉は人をひきつける。自分の暴力事件で高校時代のチームメイトを傷つけたと心を閉ざす走に対しても告げた次のような言葉。

「過去や評判が走るんじゃない。いまのきみ自身が走るんだ。惑わされるな。振り向くな。もつと強くなれ」

「速くなれ」と言われることはあつても「強くなれ」と言われたのは初めて。凍りついた心に火が灯つたように感じて走り出す。そして彼だけではなく、ほとんど共通点もないメンバーが、十人で箱根をめざすチームになっていく。

最も印象に残つたのは「走る意味」をそれぞれが考える過程だ。柏崎は、練習初日、五千メートルのタイムは三十三分十三秒十三

であつた。予選会出場の十七分以内には気の遠くなるような努力が必要だ。

私は運動嫌いで持久走などはいかにサボるかを考えていた。高校の体育祭、午前中最後の種目は長根山をまわつて帰つてくる持久走だった。ほとんど歩き、ゴールした時に皆は既に昼食を終えていた。走つた疲労と吐き氣で私はとても食事をとれなかつた。さらに大変だつたのは強歩大会。三十キロ以上もある行程に山をいくつもこえなければならぬ。途中で雨に降られたり、靴ずれで血まめが出来たり。関門で休むと一度と立ち上がれないのではないかという気持ちになつた。楽しそうに走つて行く人たちが信じられなかつた。

柏崎はなぜ努力し続けることができたのか。清瀬は「ひとつのことをコツコツ極めるのが苦にならない」漫画への情熱と持続力は長距離向きの性格だと褒めている。すぐ近くに自分をよく見て評価し、高みへ押し上げてくれる人がいたからではないか。また、彼らの姿を見て応援してくれる地元商店街の人たち、駅伝以外の陸上部のサポート。

「きみに伝えたいことがある。だから、這つてでも鶴見まで来い」

柏崎が十五キロ地点で監督車から聞いた清瀬からの伝言。自分の全力で走つていくしかない、諦めず、辛抱強く走り切る。そしてムサに檻を渡し、倒れ込むところを支えられながら聞いたのは「ここまで一緒に来てくれて、ありがとう」

という言葉だつた。

私が鷹巣高校に勤務していたころ、陸上競技部の顧問についてたことがある。監督は長距離の専門家で、私は三番目の会計も兼

ねたサポート役だ。「選手のお母さんがわりをお願いしたい」と、当時の校長に頼まれたものの、「ゼリーを買っておいて」と言われ、果物ゼリーを人数分買つてしまうくらい、陸上とは無縁の素人だつた。それだけに、雪の中でも中央公園でタイムを測つたり、大会前には試走にでかけたり、日々地道な練習が繰り返さることを驚きとともに見守つた。どうしてこんなに苦しい思いをしてまで走るのか。どうしてライバルも仲間も関係なく助けあえるのか。この小説から伝わつてくる「強さ」。

ただ純粋に、ひたすら走る彼らから、風が強く吹いてくるのだ。
（『風が強く吹いている』三浦しづく／新潮社）

読書感想文講評

審査委員長　庄 司 美穂子

本を手にしたときのわくわくした気持ちは、誰にでも経験があるのではないでしようか。本の扉の向こうには、思いもよらない出会いがあり、自分の知らない世界が広がっています。

本を読むことの最大の魅力は、「疑似体験ができる」ことであり、経験していないことでも、それを力にして「想像力を豊かに育むことができる」と言われています。

現実にはない冒険や不思議の世界など、本に登場する主人公になりきり、自分と重ねて物語を読み進めることで、まるで本当に体験したかのような感動を得ることができます。

本のページをめくると、自分とは違う境遇で、いろいろな人生を生きることができます。心が楽しく明るくなったり、また時には悲しみや悔しさを味わつたり。そのことで、いろいろな人の気持ちを考えられると、相手の気持ちを想像して優しい行動ができるようになります。

こうして、様々な世界や人生、価値観との出会いにより、広い視野で客観的に物事を捉えることができ、想像力を働かせてイメージする力や、じっくりと考える力が育まれます。本の世界を楽しみ、味わうことを積み重ねることにより、「想像する力」が培われ、感性を育むことにつながると見えます。

今年度は全部で四十五点の応募があり、昨年より二十点ほどの減少となりました。大館北秋田地区コンクールと開催時期が近く、

なかなか時間に余裕がない中、本コンクールに出品してくれたことに感謝いたします。また、御指導くださいました先生方、御家族の皆様、そして審査や作品集の発刊に御尽力くださいました多くの方々に深く感謝申し上げます。

応募された作品は、どれも、その本を読んで本当によかつたという気持ちにあふれたものばかりでした。出会った一冊の本に正面から向き合い、本が広げてくれる世界を楽しみ、共感したり感動したり、そこから考えさせられたりしたことを、自分なりの言葉で素直に表現していました。今回応募いただいた作品の中で、特に印象に残ったのは、「読書を通じた気付きから、人との関わりをいろいろな視点から見つめることで、互いの理解を深めていこうと決意した作品」でした。

読書感想文を書くことは、本と向き合い、自分自身と向き合うという貴重な時間となります。自分の考えをめぐらし、整理して相手にしつかり伝えるためには、「言葉（語彙）をたくさんもつこと」が必要です。この「言葉の力」を養うことができるのが、「読書」です。

「読書への扉」は、どこにもあります。そのきっかけをつくるのは、私たち大人の役割です。心の財産となるような本をできるだけ多く、子どもたちに出会わせたいものです。一人でも多くの子どもたちが本を愛し、読書の喜びや楽しさを味わってほしいと願っています。

次に、審査員の先生方の講評をまとめましたので、今後、読書感想文を書く際の参考にしてください。

◆小学校三年生の部

◎よかつたところ

- ・本を読んで感じたことを、自分の言葉で表現することができていました。
- ・自分の生活や経験と結びつけて書くことができました。

○今後のため

- ・その本の伝えたいメッセージについて深く考え、具体的に表現すると、思いが読み手に伝わりやすくなります。

◆小学校四年生の部

◎よかつたところ

- ・本の主人公に共感し、自分の思ったことを自分の言葉で素直に表現していました。

○今後のため

- ・一つのテーマで、原稿用紙三枚の分量を書き切る力がほしいです。
- ・書き出しを工夫してみましょう。

◆小学校五年生の部

◎よかつたところ

- ・学年の発達段階に合った本を選んでいます。
- ・規定の文字数を生かして、最後までしつかり書き切ろうとしていました。
- ・素直な思いを、自分の言葉で表現していました。

○今後のため

- ・原稿用紙の使い方では、かぎかっこや句読点の位置の誤り、ま

た、誤字・脱字などがあるため、出品する前に必ず確認しましょう。

- ・あらすじと自分の考えのバランスを大切にして書くことを心がけましょう。

◆小学校六年生の部

◎よかつたところ

- ・自分の生活との関わりを考えながら、文章の中に生かそうとしていました。
- ・書き出しの工夫で、読み手を引きつけようとしていました。
- ・本から学んだことを今後に生かそうとする前向きな思いを感じました。

○今後のため

- 今回の「小学校の部」の審査において、今後の課題として、共通して話題になったことが二点ありました。
- (1) 原稿用紙の正しい使い方についての指導が必要である。
- (2) 規定の文字数を十分に生かした作品になるように指導したい。

(※応募規定の「文字数が一二〇〇字以内」の捉え方については、原稿用紙三枚目の最後の行まで（九割程度の分量）を目標に、書き切ることが大事です。分量が少ないと、書き手の思いを十分に表現することにつながりません。)

◆中学校

◎よかつたところ

- ・作品の展開や人物の心情を捉え、自分の体験と照らし合わせながら、思いを述べていました。
- ・自分の内面やこれまでの生活を振り返り、分析することで、これから自分のあり方を思索し、その思いを力強く書き上げていました。

- ・本との出会いや、読み進めることから感じた喜びや発見が生き生きと書かれていました。

○今後のために

- ・作品との出会いが、自分をどのように変えたのかを中心に述べるとよいです。
- ・作品の内容説明に字数を多く取つてしまふと、自分の思いを述べる部分が少なくなりがちになるため、注意しましょう。
- ・登場人物と自分を照らし合わせ、自分の体験を通して実感したことについて述べると、思いが伝わりやすくなります。

◆高校・一般

◎よかつたところ

- ・読書の経験と、ご自身の人生経験を重ね、読み手に強い印象を与える感想文になつていきました。

○今後のために

- ・本の引用、あらすじ、要約などの割合が大きいと感じました。
- ・自分の思ったこと、考えたことをより詳細に、具体的に伝えることを心がけましょう。

令和7年度 北秋田市読書感想文コンクール入賞者一覧

小学校3年生の部

賞	氏名	学校名	題名
特選	佐藤 カンナ	綴子小学校	しつぱいにかんぱい！
入選	田崎陽也	米内沢小学校	ぼくがまもる
入選	成田乙葉	鷹巣小学校	おばつちが教えてくれたこと
佳作	金田蓮正	米内沢小学校	やさしいかえるくん
佳作	佐藤柚和	鷹巣東小学校	友だち
佳作	櫻井奏空	合川小学校	「ごめんね」を言うには

小学校5年生の部

賞	氏名	学校名	題名
特選	三浦歩夢	鷹巣小学校	ぼくが知らなかつたゴミの話
入選	片岡恵愛	鷹巣小学校	水族館の飼育員さんはすごい！
入選	近藤彩蓮	米内沢小学校	みんななかよく
入選	米倉道親	鷹巣小学校	勇気とやさしさのビザ
佳作	西村蓮	清鷹小学校	あきらめないことが大事
佳作	中嶋珠寿	鷹巣小学校	私のくつ
佳作	堀内日彩	鷹巣小学校	小さな命を守りたい
佳作	塩崎結羽	合川小学校	「ずるやすみ」は心の手当て？

賞	氏名	学校名	題名
入選	羽場大耀	米内沢小学校	「クジラと海とぼく」を読んで
佳作	赤木暖	米内沢小学校	お互いにわかり合うために
佳作	田彩乃	合川小学校	戦後80年がたつて
佳作	入選	入選	入選

小学校6年生の部

賞	氏名	学校名	題名
佳作	岩谷絢	鷹巣東小学校	何気ない毎日に感謝して
佳作	高橋來愛	綴子小学校	いのちをいただく
入選	中嶋真悠	清鷹小学校	少數派になる勇気

中学校の部

賞	氏名	学校名	題名
特選	堀内希咲	鷹巣中学校	人を見つめたい
入選	佐藤あおい	鷹巣中学校	「違い」が希望になる
入選	庄司心優	鷹巣中学校	よりよい人生を送ること
入選	鈴木萌生	鷹巣中学校	優しさの形
佳作	宮腰栄來	鷹巣中学校	夢を叶えるために
佳作	成田彩乃	鷹巣中学校	支えになる行動を

高校・一般の部

賞	氏名	学校名	題名
佳作	田中秀子	一一般	地獄を考える
入選	成田八千代	一般	君に伝えたいことがある

令和7年度 北秋田市読書感想画コンクール入賞者一覧

保育園・認定こども園の部

賞	氏名	学校名	題名
特選	佐藤 彩	前田保育園	わたしのおしろであそびましよう！
入選	上杉茉白	阿仁合保育園	にんじんろけつとにのつてしまつぱーつ！
入選	柳谷奏汰	前田保育園	うわあー！ おつきいなあ
入選	齊藤悠真	米内沢保育園	うみのなかにいってみたいな
入選	北林佑翔	米内沢保育園	パパのうんてんみんなでおうえんしているよ
入選	佐藤蒼虎	鷹巣中央保育園	そらをとびたいな！
入選	畠山茉優	鷹巣保育園	えきにとうちやく
入選	佐藤薰	南鷹巣保育園	はなびたのしそう
入選	鈴木柊也	鷹巣東保育園	こんちゅうだいすき
入選	松尾奏壱	阿仁合保育園	ぼくのいえは、うちゅうの110かいだて!!
佳作	鶴見翔	米内沢保育園	おうちからはたらくるまがたくさんみえたよ

小学校1年生の部

賞	氏名	学校名	題名
特選	成田陽斗	綾子小学校	ライオンのカラフルなせかい
入選	細貝在	阿仁学園	クリームソーダにはいったしろくまちゃん
入選	吉田琥翔	米内沢小学校	あさがおとあそぼう
入選	藤嶋桃々	清鷹小学校	チリンのおたんじようびかい
入選	松橋零々	鷹巣小学校	ふしぎなもりにあるおかしのいえ
佳作	庄司悠	清鷹小学校	あさがおとわたし
佳作	福原朱織	鷹巣小学校	きょだいだいこんのむら
佳作	工藤優斗	鷹巣小学校	やどかりのパーティー
佳作	小塚響斗	鷹巣小学校	ながいバナナのすべりだいであそぼう
吉田唯亜	鷹巣小学校	鷹巣小学校	ながいバナナのすべりだいであそぼう
合川小学校	合川小学校	合川小学校	合川小学校

小学校2年生の部

賞	氏名	学校名	題名
入選	石川心絆	清鷹小学校	ぼうしやさんからかえってきたよ
入選	近藤心來	鷹巣小学校	魚たちとあそんだよ
入選	若松詠樹	米内沢小学校	にぎやかな海の中
入選	赤石湊真	鷹巣東小学校	やさいがいっぱいおいしいごはん
佳作	西村藍心	清鷹小学校	ぼうしやさんからかえってきたわくわくのみんな
佳作	コリガン琉生	鷹巣小学校	みんなであそぼう
佳作	佐藤心陽	鷹巣小学校	3人で楽しもう
佳作	石戸帆華	鷹巣小学校	みんなの大好きな木
佳作	石田惺羅	合川小学校	新しい家ができたよ

応募された方々 〈感想文〉

小学校3年生	金田蓮正（米内沢小）	田崎陽也（米内沢小）	佐藤力シナ（綴子小）	佐藤柚和（鷹巣東小）
小学校4年生	片岡恵愛（阿仁学園）	柏木紅葉（阿仁学園）	鈴木空翔（米内沢小）	近藤彩蓮（米内沢小）
西村蓮（清鷹小）	伊東青羽（清鷹小）	柑奈（清鷹小）	簾内姫優花（清鷹小）	池田奏冴（清鷹小）
出川翔誠（綴子小）	圭哉（綴子小）	道親（綴子小）	堀内日彩（綴子小）	田代咲（清鷹小）
中嶋珠寿（鷹巣小）	塩崎結羽（合川小）	赤木暖（綴子小）	堀内彩乃（合川小）	三浦歩夢（鷹巣小）
小学校5年生	武石朝輝（米内沢小）	羽場大耀（米内沢小）	高橋勇登（綴子小）	高橋來愛（綴子小）
中嶋真悠（清鷹小）	佐藤翔太（綴子小）	岩谷絢（鷹巣東小）	三澤光河（綴子小）	宮腰葵（合川小）
堀内奈津葵（綴子小）	鈴木ひまり（鷹巣東小）	成田葵（合川小）	庄司心優（鷹巣中）	庄司心優（鷹巣中）
中学校	田中秀子（一般）	堀内希咲（鷹巣中）	佐藤あおい（鷹巣中）	成田八千代（一般）
中学校	成田洋子（一般）	鈴木萌生（鷹巣中）	鈴木彩乃（鷹巣中）	成田・一般
高校	成田・一般	鈴木彩乃（鷹巣中）	中嶋珠寿（鷹巣中）	中嶋珠寿（鷹巣中）

応募された方々 <感想画>

保育園・認定こども園

佐藤	梨紗	(鷹巣中央保)	成田	煌	(綴子保)		
高橋	望来	(鷹巣中央保)	藤嶋	柊馬	(綴子保)		
林	暖大	(鷹巣中央保)	九嶋亜衣奈	(綴子保)	金	悠愛	
白根	颯斗	(鷹巣中央保)	長谷川鳳海	(綴子保)	櫻田	心晴	
泉谷	杏	(鷹巣中央保)	小峰	葉生	佐藤	香帆	
津谷	海稜	(鷹巣中央保)	布田	兎澤	佐藤	洋人	
藤田	彩愛	(鷹巣中央保)	武石莉乃愛	凜	木村	結愛	
春日	丈亮	(鷹巣中央保)	(南鷹巣保)	柴田	薰	香乃華	(あいかわ保)
浅田	玲	(鷹巣中央保)	(南鷹巣保)	笠松ひなた	心晴	高橋	樹(しゃろーむ)
佐藤	蒼虎	(鷹巣中央保)	(南鷹巣保)	工藤	朔	高橋	結奈(しゃろーむ)
藤田	望乃彩	(鷹巣中央保)	(南鷹巣保)	藤本	桃寧	伊東	一華(しゃろーむ)
武田	咲良	(鷹巣中央保)	(南鷹巣保)	佐々木	楓麻	武内	栄子(しゃろーむ)
津谷	椿	(鷹巣中央保)	(南鷹巣保)	米澤	千優	田村	陽大(しゃろーむ)
春日	陽愛	(鷹巣中央保)	(南鷹巣保)	櫻田	桐生	武田	泉杜(しゃろーむ)
金	楓	(鷹巣中央保)	(南鷹巣保)	佐藤	香樹	田村	照内(しゃろーむ)
嶺脇	碧	(鷹巣中央保)	(南鷹巣保)	藤田	里渚	澤田	津谷(しゃろーむ)
伊東	愛乃	(鷹巣中央保)	(南鷹巣保)	伊東	麗朱	佐藤	実莉(しゃろーむ)
浪岡	柊華	(鷹巣中央保)	(南鷹巣保)	藤嶋	真帆	木村	結愛(しゃろーむ)
熊谷	奏祐	(鷹巣中央保)	(南鷹巣保)	伊東	五代儀ひので	木村	高橋(しゃろーむ)
伊東	悠月	(鷹巣中央保)	(南鷹巣保)	片岡	(しゃろーむ)	香乃華	樹(しゃろーむ)
佐藤	宏太	(鷹巣中央保)	(南鷹巣保)	久保田ゆあ	(しゃろーむ)	高橋	結奈(しゃろーむ)
(綴子保)	(綴子保)	(綴子保)	(南鷹巣保)	木村鱗太樓	(しゃろーむ)	佐藤	一華(しゃろーむ)
三浦	松尾	(鷹巣中央保)	(南鷹巣保)	櫻田	杏	安藤	音咲(しゃろーむ)
心詩	畠山	(鷹巣中央保)	(南鷹巣保)	佐藤	希幸	信太	佐藤(しゃろーむ)
(綴子保)	(綴子保)	(綴子保)	(南鷹巣保)	佐藤	彩羽	一真	澤田(しゃろーむ)
米沢	小松	(鷹巣中央保)	(南鷹巣保)	佐藤	希幸	音咲	佐藤(しゃろーむ)
畠山	佐藤	(鷹巣中央保)	(南鷹巣保)	佐藤	彩羽	安藤	音咲(しゃろーむ)
(綴子保)	(綴子保)	(綴子保)	(南鷹巣保)	佐藤	希幸	信太	佐藤(しゃろーむ)
(綴子保)	(綴子保)	(綴子保)	(南鷹巣保)	佐藤	彩羽	一真	澤田(しゃろーむ)
(綴子保)	(綴子保)	(綴子保)	(南鷹巣保)	佐藤	希幸	音咲	佐藤(しゃろーむ)

北林 佑翔 (米内沢保)

小学校2年生

上杉	森川	船橋	七瀬	(阿仁学園)
木村	岸野	礼佳	彩愛	(米内沢小)
木村	松橋	瑛斗	(米内沢小)	(米内沢小)
木村	森川	詠樹	(米内沢小)	(米内沢小)
木村	若松	叶奈	(米内沢小)	(米内沢小)
木村	米澤	叶偉	(米内沢小)	(米内沢小)
木村	新林	真礼	(米内沢小)	(米内沢小)
木村	高杉	相沢	彩葉	(鷹巣東小)
木村	赤石	赤石	湊真	(鷹巣東小)
木村	五代儀	五代儀	大和	(鷹巣東小)
木村	佐藤	佐藤	佐藤	(鷹巣東小)
木村	岩谷	岩谷	柚櫻	(鷹巣東小)
木村	田村	田村	雪空	(鷹巣東小)
木村	桃李	桃李	チュウ	(鷹巣東小)
照内	颯志	颯志	(鷹巣東小)	(鷹巣東小)
長谷川瑠海	(鷹巣東小)	(鷹巣東小)		
木村	朔夜	(鷹巣東小)		
木村	(鷹巣東小)			

松岡	新田	瀬下	関	杉渕	佐藤	櫻庭
桧生	優斗	涼翔	隆翔	由衣乃	慎之助	唯斗
(合	(合	(合	(合	(合	(合	(合
川	川	川	川	川	川	川
小)	小)	小)	小)	小)	小)	小)

令和 7 年度 応募者数及び入賞者数一覧
《読書感想文》

部 門	応募者	特選	入選	佳作	入賞者計
小学校 3 年生の部	6	1	2	3	6
小学校 4 年生の部	17	1	3	4	8
小学校 5 年生の部	4	0	1	2	3
小学校 6 年生の部	9	0	1	3	4
中学校の部	6	1	3	2	6
中学校の部 学年別内訳 (全学年で 1 部門)	1 年生 2 年生 3 年生	4 0 2	1 0 0	1 0 1	4 0 2
高校・一般の部	3	1	1	1	3
合 計	45	4	11	15	30

《読書感想画》

部 門	応募者	特選	入選	佳作	入賞者計
保育園・認定こども園の部	93	1	4	6	11
小学校 1 年生の部	113	1	4	5	10
小学校 2 年生の部	108	0	2	7	9
合 計	314	2	10	18	30

《読書感想文・読書感想画の合計》

部 門	応募者	特選	入選	佳作	入賞者計
読 書 感 想 文	45	4	11	15	30
読 書 感 想 画	314	2	10	18	30
合 計	359	6	21	33	60

<読書感想文・読書感想画コンクールの歴史>

昭和 40 年度～第 1 回鷹巣町読書感想文コンクール
平成 9 年度～第 1 回鷹巣町読書感想画コンクール

※昭和 40 年度～平成 16 年度まで

鷹巣町読書感想文コンクール 通算 第 40 回
鷹巣町読書感想画コンクール 通算 第 8 回

※北秋田市（4 町合併後）

平成 17 年度 北秋田市読書感想文・読書感想画コンクール（第 1 回）

↓

令和 7 年度 北秋田市読書感想文・読書感想画コンクール（第 21 回）

通算 感想文 第 61 回

感想画 第 29 回

滑川道夫 先生の題字「読書のあとで」は第 8 回から受け継がれている

令和7年11月
北秋田市教育委員会